

“きび考”

2013年（平成25年） 第8号

先史古代研究会

“きび考” 2013(平成 25)年 第 8 号 目 次

○旭川の生成と古代吉備平野	矢吹壽年……………2
★後援の案内 新邪馬台国サミット 主催 テレビせとうち	……………5
○先史時代の衣類の考証	濱手英之……………6
衣類の起源はどこにあるのか	
○考古フアンのじゃれごと 2 編 ⑧と⑨	山崎泰二……………8
*縄文人と弥生人の関りを記紀に見る	
*私の仮説を専門家が立証	
○父の遺作書に接して=『五島列島高天原説』	村山三枝子……………12
「浮かび上がってきたもの」	
○宗良親王と南朝の忠臣の同行	井上秀男 ……15
○“やきもの”の話し(陶磁器の分類、粘土とは)	延原勝志……………18
○氣比神宮末社 擬領神社と黄蘗(吉備)国	丸谷憲二……………20
○連載 四国八十八ヶ所 巡り 「歩き(ウオーク)遍路の旅」6	樋口俊介……………26
○例会報告と案内 編集後記	編 者……………32

新会長就任挨拶 (要旨) 会長 丸谷憲二

先史時代とは何か。教科書には「人類が出現してから文字を発明して歴史に記録を残すようになるまで」とあります。人類史の 99%を占めるこの時代を一般に先史時代と呼びます。文字として記録されていない時代で、人類史の 99%が先史時代なのです。一般に「歴史」は記録されることで生まれます。先史時代は、その前の段階です。現代は歴史時代の延長です。

日本の歴史時代はいつ頃始まったのか。弥生時代から古墳時代にかけてと言われていています。魏志倭人伝や漢書地理志などの文献に日本は登場しますが、これは中国の文献であり、日本の歴史時代の始まりではありません。

会員は先史古代学以外にも色んなことを研究しています。その研究成果を発表します。会の基本は先ず顔を合わせよう。そして自由なフリートーキングでの交流です。

平成 25 年 4 月 17 日 定期総会にて

活動内容(25 年度計画)

- 1 定期例会 5 回/年 研究発表と情報交換
- 2 古代吉備探訪 1 回/年 「高嶋伝承地を歩く会」を開催
- 3 機関誌『きび考』発行 2 回/年
- 4 先史古代研究会ホームページ公開中

旭川の生成と古代吉備平野

会員 矢吹壽年

1.はじめに

現在からは、考えられないような自然の営みがあって、その後の自然の営み、人類が岡山の地にやって来て、その足跡が確認できるのです。素晴らしいと思いませんか。私は 1940 年の生まれで、今年 74 歳となります。生まれは戦前派ですが、育ったのは戦中派、小学校に行く時は戦後派の筆頭でした。

第二次世界大戦の、前とあとでは歴史の把握、感覚が異なります。米国を主とする、国際連合軍の日本民族の報復を恐れる気持ちが、一番の原因だろうと思いますが、これは現在も存在するようで、日本の敗戦後、何年になりますか、米国のアジア戦略の好適地として沖縄の基地提供が続いています。

政府は米国と親密に交際できることで、政権維持を図っていますが、所詮、米国人とは一戦ある事は避けられないことを認識しておかねばならないと思っていますものの一人です。



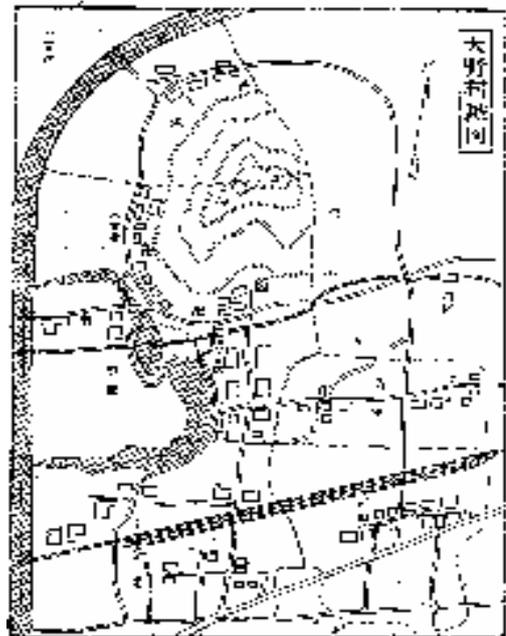
牧石宗谷山から南 旭川下流を望む(筆者提供)

ところで、この旭川が仕出かした、岡山の平野化と河淵の抉(えぐ)りは、その後の備前平野の歴史と関係があるのです。冒頭に、歴史観の変更、交替があったこととお話しましたが、それまでの歴史を教育する根本に、以前と変更があったようです。戦前の軍国教育、皇室敬体の教育は改められ、民主という名の無圧、自由主義が蔓延したように思います。

そんな中で、小学校の学区外で夏期の郷土歴

史講座が開かれ、資料の内容は戦前の御津郡地図の裏に書かれた、戦前から知られた遺跡の案内でしたが、古墳の案内や、説明が少し変わっていたように思います。前方後円型古墳が意識され、この形の古代の墓は日本に限られ、その古墳が吉備中山の茶臼山と呼ばれた御陵であり、尾上のギリギリ山と呼ばれた車山古墳、松尾の旧馬屋小学校の裏山の飯盛山古墳であったと思います。

この時スタッフの中に居られた佐藤勲先生が、その後中山中学校に赴任せられて、授業は英語の文法であったように思いますが、当時は前方後円墳といわれていた辛川市場の中学校敷地の校舍裏の丘を発掘したことがあります。前方部に当たる辺りの現在、東側からの石段を上った辺りに、円筒埴輪を掘り出して、前方後円墳であったと話されました。



市編入当時の大野村見取図(大野村誌より)

その佐藤先生とは、地元のボーイスカウト団の指導者でもあり、後に町教育委の職員となった私とも関係ができたのです。その佐藤先生が退職後、「目で見ると。あけゆく郷土」(岡山市御南地区)という郷土誌を昭和63年に書かれました。知人を介して購入し、その後何度か先生の記録から読み出したことを、私の講座で披露

しましたが、その内、少し考えを改めなければならぬことに気が付きました。

大野村誌に巨大な河口湖というか、池があって、これが古代の笹ヶ瀬川で、野殿地区は津高郡に属していましたが、明治22年の町村制施行に際し、合併、大野村と名称を整えて発村します。

2. 蒜山三座の噴出

蒜山原（ひるぜんばら）は、小学校高学年になると何度か訪れました。観光バスガイドが、そのたびに蒜山湖と云う巨大な湖であったと話していました。蒜山三座は形良い山だと子供心に思ったものです。しかし蒜山湖が流れ出して、岡山平野を造成するなんて、思わなかったし説明も記憶していません。

岡山と鳥取の分水嶺の北側に、今から約100万年前、蒜山三座が現れました。以前は白山火山帯と名付けられていた火山が爆発、三座を形成して60万年以前頃鎮まった。分水嶺と蒜山三座の間に出来た沢の水は西に流れ、やがて日本海へと流れ出していました。



蒜山三座と古蒜山湖(真庭観光連盟提供)

3. 大山火山の噴出

大山の最高峰は1729mの剣ヶ峰で、約30万年前頃に噴出し中国地方最高峰となる。中国地方に住む人々の死後の魂が上る山と云う伝説は、仏教伝来後の大山寺に起こった地藏信仰にも、原因は求められるだろうが、古代からここを訪れた人たちの共通感覚ではなかったろうかとおもいます。形の良い富士山型を称して伯耆富士とも云い、古代以来日本海航路の

目当て山となっています。

大山は、180万年から50万年前に噴火形成された成層火山の古期、大山のカルデラ上に巨大な溶岩ドームを形成します。以後も数回にわたり潰滅な大噴火を起こしており、中でも5万年前の噴火は大規模な軽石、火砕流を噴出します。2万年前にも噴火し現在の彌山、三鉢峰、烏ヶ山の溶岩ドームを形成し、最後の噴火は1万年前であって、以後の噴火は記録されていない。この30万年前の噴火で、西流する水路を溶岩流や火砕流で遮断したため巨大な古蒜山湖となる。東西約20kmに及ぶ広大な湖が形成された。

ここに四季の雨雪が止められ、火山性の噴出物や硫黄等、肥料分を溶解し、高栄養化の湖水に藻類が大量に繁殖し、100mを超える珪藻土層（珪藻が堆積、化石となったもの）を形成する。やがて湛水と蒸発を繰り返していた蒜山湖も満水となる。あふれた水の行き先は南の岡山側へと流れ出す。台風の集中豪雨か、雪解けのころか、或いは大山の火山活動による地震か。現在では予想もできない。或いは、少量ずつ流れ出して河道を付けたかもしれない。しかしこれが、確実に旭川の水源としてのイニシアチブを取っていたのである。



約2000年前の御南4ヶ村想像図 佐藤勲氏作図

あけゆく郷土(御南地区)掲載

こうして旭川は河川底部の土、岩、草木も根こそぎ、音を立てて怒涛のように流れくんだり、

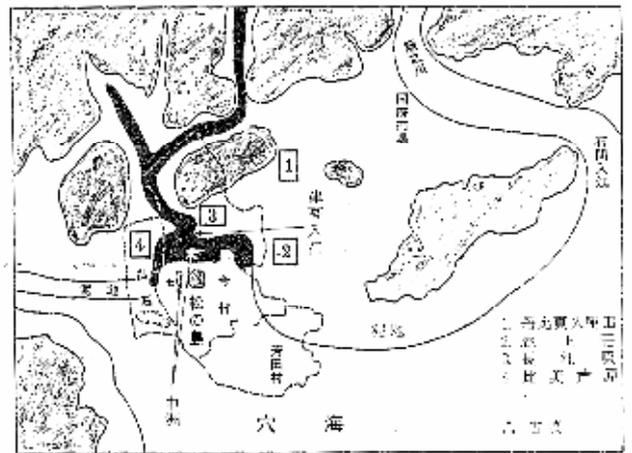
川幅を広げ川底を掘り下げながら、或いは滞留して、峠の低いところは乗り越えて流し、巨岩に当たった所では深い淵を掘り下げて流れ下り、現在の岡山平野に近い風景としたのです。

こう考えれば、三野の水源地の現在の地表から約 4m 下に弥生時代の住居跡が確認され、鹿田の岡大付属病院敷地の 1m 下から弥生時代の住居址、水田跡が確認されている。水田には天水池と見られる皿状の窪みが確認されました。水稻を作ろうと苦労したあとも知れません。山間から開放された水は谷口を掘り下げ、川下の流下速度が落ちたところで、砂泥や小石を沈殿させるので跡は高くなります。

大供の石門別神社の境内には角（かど）の取れた石が転んでいる。名前に因んだ石を寄せたとも考えられるが、水流の関係でここだけは、多くの石が残ったのだろう。

鹿田地区は、吉備の大島、鹿田（かた）の大島とも呼ばれ、平安時代藤原氏の「殿下渡領」と呼ばれた藤原氏の渡り領であったと伝えるが、池田忠雄の頃、西川用水路の開削によるまで、良い水田ではなかったことを指摘しておきたい。用水の上がらない陸田で陸稲（おかぼ）しか作れなかったのである。岡山理科大学の進入路敷きにある「朝寝ヶ鼻」貝塚から出土した陸稲の作られた陸田は実に湖の鹿田であったかも知れない。

ところで岡山市内の旭川は宇喜多秀家による新城築き上げ以前は、祇園辺りから東南へ蛇行し大多羅辺から、児島湾内に流出し、本流となっていた。県立図書館辺りから、船頭町、浜野辺りが旭川の川津となっていて、法



約 1200 年前の御南 4ヶ村 作図 佐藤勲

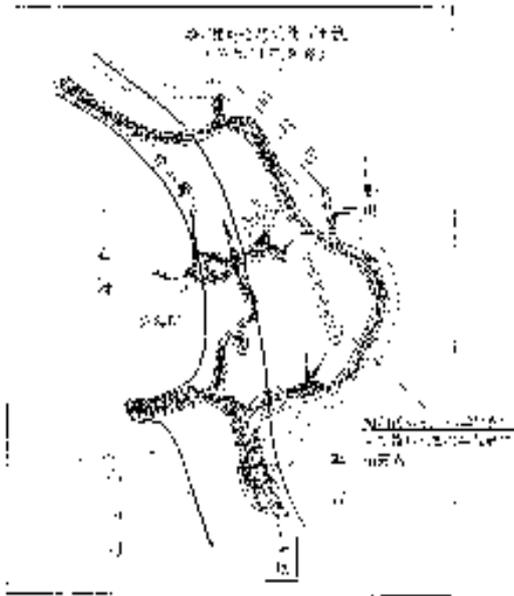
華宗の西国弘通に際し、豊前地区を訪れた大覚大僧正・妙実の来由を船路としているのを見れば、細い流れも存在していたようだ。大野村誌に示された巨大な河口湖は笹ヶ瀬川であるが、笹ヶ瀬川はこのような流量は示さない。蒜山湖の水があふれて笹ヶ瀬川と合流して吉備中山に打ち当たり、一宮・平津沖の平野を造成した時、深い淵を残したものであろう。余勢をかって吉備の中山の北麓を巡り、川入・撫川から児島湾にも流出していたと指摘したい。この地域は十二ヶ郷用水の管轄区域で、高梁川の旧流域と考えられるが、川入の辺りに転ぶ岩礫に水成岩は多くない。

一時のみ蒜山湖の水流を流した跡が溝状地となって残っていたのを、後に排水溝として使用したものへ、泥や砂を掻き揚げて他の水田と高さを均して。撫でるようにしてできた新田と云う意味を持たせたのが撫川であろう。川は無くなって美田となったのである。

私の実家は北区の一宮山崎であるが、実家の井戸を新掘した時に 7~8m 下の地中から、海岸等で見かける芥状のごみが炭化して出土したと伝える。私の邸は今岡にあるが、水道管敷設の時、隣地を掘削したとき、これも 7m 位掘った時、同様の炭化物の出土があった。

4. 蒜山湖の土手の決壊はいつごろか

では、旭川が蒜山湖の湖水を流して蒜山原になったのは何年ごろか。岡山理科大学の鎌木



笹ヶ瀬川改修前後の比較 昭和 13 年改修

先生が蒜山原で縄文土器を採集されてから、理科大学では旧石器時代の遺跡から石器を発掘している。

その成果（竜頭遺跡）からみると、発掘土壌層からみて、2万2000年～2万年と結論している。湛水がなくなって、どのくらいで古代人が追跡する大型動物が棲めるものかは、食糧となる草や木が成長するものか、について異論はあるだろうが、とにかく3万年以前くらいに蒜山の湖水が流下し岡山平野が出現して、その時の泥が、現在の四国まで届いていて、縄文人は四国まで歩いて行くことが可能だったという。それならば高梁川は西流して豊後水道に流れ、吉井川や旭川は、東流して紀伊水道に流れていたことになる。

倉敷市児島沖の堅場島の浜には多数のサヌカイトの原石、加工途上品や未完成品の石器が残る。原石地（今の香川県）にいちばん近い加工工場であったかもしれない。

私が残念に思うのは、佐藤勲先生の『目でみる。あけゆく郷土』に記録してある遺跡や、遺物を現在の研究者達が把握していないことである。御南中学校の運動場から縄文人の屈葬墓

が見つかったことなどを、岡山市の遺跡地図にも記載がない。（現県立西養護学校敷地＝岡山市南区田中地先）。

縄文人が築墓した標高は大切である。東日本震災に伴う津波の被害も縄文遺跡には、ほとんど及んでいないというのではないか。

第2回新邪馬台国サミット

日時 12月1日（日）午後1時から

場所 山陽新聞本社 9階講堂

主催 テレビせとうち

後援 先史古代研究会・岡山歴史研究会等

講演 「丹波説」 伴 とし子氏

「阿波説」 林 博章氏

「吉備東遷説」 岡 将男氏

シンポジウム

上記三氏と

「近江説」 澤井 良介氏

「山陰説」 田中 文也氏

「吉備説」 若井 正一氏

コーディネーター

吉備学会事務局長 近重博義氏

コメント

昨年の第1回は大変好評でした。今年は新たに、三説を加えての激論が予想され大変楽しみです。

岡将男氏は当会の会員で、卑弥呼の吉備信奉者で、著作も進んでいるようです。

今回は先史古代研究会も後援します。チケットなどの詳細は決まっています。

「名刺交換・懇親会」も計画中です。

先史時代の衣類を考証

衣服の起源はどこにあるのか？

会員 濱手英之

先史古代の時代はわからないことだらけだ。衣服一つとってもそうである。我々は、太古の人たちの服装をほぼ裸であるか、もしくは毛皮などを着ていたのではないかと考えている。しかし、実際は相当古くから凝った衣服を身につけていたことがわかってきている。

以下にナショナルジオグラフィックから抜粋する。

衣類の起源はどこにあるのか？この問いは、単純であるがゆえにかなりの難問だ。映画や漫画などに登場する原始人は獣の毛皮を身にまとっている場合が多いが、実際はよくわかっていない。衣服を身に付ける行為は人類だけの特徴だが、その習慣が発達した経緯を解明しようという試みはまだ始まったばかりだ。

衣服が化石として残るケースはほとんどなく、骨を取り巻く軟組織と同様あっという間に朽ち果ててしまう。だが研究者たちは、染色された植物繊維や衣服に寄生していたシラミなど間接的な証拠物を手掛かりに、先史人類の服装を断片的にはあるが明らかにしつつある。

古代の服飾類で特に古い遺物には、アメリカのオレゴン州で出土した樹皮の繊維を素材とする約 8000 年前のサンダルや、エジプトの約 5000 年前のシャツやビーズ付きドレスがある。また、アルプス山中で発見された約 5300 年前のミイラ、アイスマン（エッツィ）が身につけていた獣皮と干草の編み靴、毛皮の上着、皮製のゲートルや下着などが知られている。（特に、彼のつけていた毛皮のコートは、少なくとも 2 種類の皮を使用し、縞模様のデザインが施されていたらしい。彼は私

と同じ 40 代であつたらしいが、おしゃれにもすっかり気を使っていたようだ）だがフランス、ボルドー大学の考古学者レベッカ・ラグ・サイクス（Rebecca Wragg Sykes）氏によれば、さらに古い年代の遺物が必要で、この程度では不十分なのだという。

例えば、ロシアで発見された約 2 万 8000 年前の墓をはじめ、先史時代の墓からは、衣服の装飾用と見られるビーズや歯など、当時の服飾を伺わせる遺物がわずかながら見つかっている。

しかし、これらはみな被埋葬者用の衣服だ。先史時代の人々が日常生活の中でどのような衣服を身につけていたのか、まだ明確な結論は出ていない。一方、数万年前の人類が衣服を仕立てていた間接的な証拠はいくつも存在する、とサイクス氏は話す。



縄文人の衣類(尖石遺跡縄文考古館より)

アメリカ、ジョージア州の洞窟群からは、約 3 万年前の植物繊維が見つかっている。ピンクや黒、青に染められており、当時の布地作りに関する手掛かりになるだろう。また、約 2 万年前の骨針も発見されているが、おそらく衣服や装飾品の縫製に使われたのだろう。

先史時代の人々を描いた想像図などでは、粗雑な毛皮を身にまとった姿が大半だ。だが考古学的資料から判断すると、2 万 5000 年前には、既に複雑な衣服が作られていたとサイクス氏は指摘す

る。

ところで、先史時代の人類はわれわれホモ・サピエンスだけではない。近縁種とされるネアンデルタール人も間違いなく衣服を着ていたと考えられており、興味深い研究が行われている。

2012年、アメリカのコネティカット大学で人類学を専攻する大学院生ネイサン・ウェールズ(Nathan Wales)氏は、ネアンデルタール人が着用していた衣服について詳しい分析を試みた。

ウェールズ氏はまず有史以降、狩猟採集生活を営んでいた245の文化圏に見られる服装の特徴と、それぞれの生活環境条件を調査。氷河期の間、特に寒冷な地域で暮らすネアンデルタール人は体表の80%以上を衣服で覆う一方、気候にふさわしいものではなかったという仮説を立てた。

ネアンデルタール人に比べて、現生人類は寒さに対する耐性が低い。そのため、防寒効果のある衣服を仕立て、それに身を包んで冬の寒さをしのいだと推測したのだ。

その後われわれ現生人類は生き残り、ネアンデルタール人は絶滅する(身体的、文化的な観点から見た場合、ネアンデルタール人の遺伝子は現生人類に受け継がれている)。原因はいまだ不明だが、ウェールズ氏は両者の服装文化の違いが何らかの影響を与えているのではないかと考えている。

原生人類にネアンデルタール人の遺伝子が混血していることが分かったのもつい最近である。解析技術の進歩で長年の謎がとかれることは、何とも好奇心がそそる。

そして、身近にも、倭文織(しずおり)、どんぞ、等、消えてしまった衣料、技術は多い。新しいものの中には、なかなか新しいものはないと感じる。古いものにこそ新しいものがあると信じる。先史古代への興味はいつまでも尽きない。

以上、主にナショナルジオグラフィックニュースより参考にしました。

幻の「倭文織」体験人気

津山、染色作家ら作品展

(2012/12/6

の山陽新聞掲載)



岡山県津山市の倭文地区には古代の織物を再現するグループがあり、詳しくは同誌を参照されたい。(写真をクリックするとリンク先を表示します)(ただしパソコン上のみ)

考古ファンの「じゃれごと」⑧

縄文人と弥生人の関りを

記紀に見る(猿田彦のこと)

会員 山崎泰二

私は予(かね)てから、約2500年の昔に中国の江南(呉の時代)地方から水耕稲作の技術を携えて日本列島に渡来し、先住民である縄文人と「和合」し新しく、弥生人の社会ができて今日があると信じて来た。残念ながら素人の浅ましきで、それを立証することが出来ないうい。そんな矢先に全国歴史研究会が発行している「歴史研究」なる冊子が届いた。その中に三重県鈴鹿の会員で小林伊佐夫氏の論文「私説猿田彦の正体」が目にとまり合点した次第である。

記紀による神話の世界に出てくる、猿田彦のことは一般に良く知られている。道先案内の神として身近な存在である。高天ノ原から葦原の瑞穂の国(当時の日本列島)に、ニニギノミコトら一行が降臨した時に、地元の国神(くにつかみ)の猿田彦が案内した件(くだり)の説話である。当時(縄文晩期)の日本列島には、豊かな森に木が茂り、清らかな水が小川に流れ、果樹の実も豊富で、川の浅瀬では魚も捕れたし葦原が広がって、先住民(縄文人)が住んでいた。そんな光景が眼に浮かぶ。そこに天神(あまつかみ)が渡来して来て日本国を統治することになる。



「百間川の遺跡探検」より水田の様子
岡山県古代吉備文化財センターのパンフより

先住民も穀物の中でも稲=米の美味しさを知っていて、陸稲を栽培し焼畑を続けながら移動していた。稲の欠点である連作障害を乗り越えるためには、焼畑で移動しながらの耕作であった。そこに水耕稲作技術を持った渡来人は、故郷の中国江南地方に比べ、より管理のしやすい豊富な小川が随所にある日本列島に定住して稲作を始めた。質・量とも先住民の陸稲とは比較にならない。遠くで見ていた縄文人は、戦って排斥するのではなく「和合」の道を選び、お互いの長所・技術・経験を生かした「共生」が始まった。と私は推論している。

和合の証拠が古事記に猿田彦として登場していたのだ。縄文人の末裔であるアイヌの人々が使っていることばを研究し精査された、小林伊佐夫氏は概ね次のように説明されている。

「猿田彦の猿(サル)はアイヌ語で葦原を意味し、田(タ)はある(有る・在る)を意味する。彦はオトコ(男)の意味で、葦原に住む人達」

との明快な解説である。さすれば国神が天神を案内したとする古事記の編纂者は、当時から約1000年も昔のことを、猿田彦との逸話として我々に残してくれたことになる。

全国歴史研究会の仲間の研究成果で、私の推論がまた一つ確証された。新しい学びを得た「歴史研究」の冊子であった。



弥生末期 岡山の百間川遺跡では田植えをし
弥生人の足跡も残っていた 山崎撮影

考古ファンの「じゃれごと」⑨

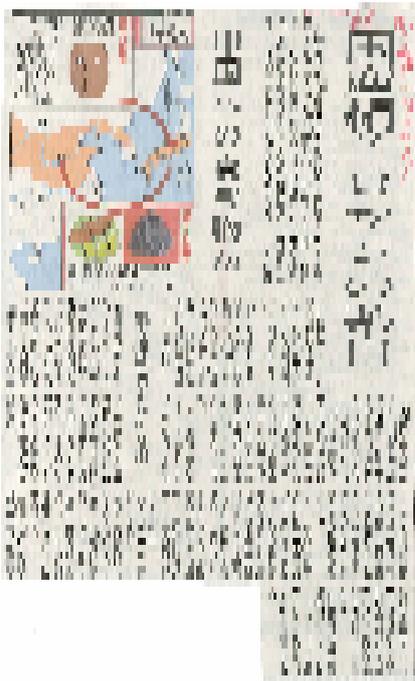
私の仮説を専門家が立証

『国産絹？ロマンの糸口』

会員 山崎泰二

(1) 纏向遺跡(3世紀後半)で出土分析結果

表題の件は考古ファンの「じゃれごと」シリーズで発表していて、そのNO⑤を2012.1.21に起稿し2月29日発行の“きび考”5号に掲載し発表した。タイトルは「古代社会の産業革命と異文化の融和」と題し、主に水耕稲作技術とそれを受け入れた先住民(縄文人)の関係を論じている。



2013.25.5.31 朝日掲載記事

私はその中で、魏志倭人伝の絹は「山繭」と仮説を立てています。当時は学術的に国産の繭が定着していない状況で、倭人伝に記載されている『絳青縑(こうせいけん)＝赤と青の絹』の定説がなかったのですが私は次のように表現しています。

『魏志倭人伝にも絹のことが出ています。生糸(養蚕)は5世紀に伝わったとされていますから弥生時代は絹の生産はありません。しかし栽培種の粟に巻きつく山繭の存在を彼等が見落す訳がありません。中国地方の山塊を散策していると、今でも山繭を見かけます。金糸は貴重でした卑弥呼が中国の魏王に献上したのは黄金に輝く金糸であったと想像しています。漆の採取も知っていたことでしょう。吉備の山間地には漆の木が多く自生しています。漆技術は中国より日本列島の方が1000年も早く縄文中期の遺物が出ています。

繊維質の多い麻や三椏(みつまた)・コウゾは今では和紙の材料ですが当時は、水にさらし柔らかくして布にしました。木綿(ゆう)と書きますが綿から採った糸で編んだ今日の木綿(もめん)ではありません。着物は当時機織が有りませんから当然女性らによる手織りでした。枝に縦糸をつなぎ睡でシャトルのように行き来して編み上げて行ったのです。今でも布の幅は女性の肩幅(3~40cm)と決まっています。女性は貫頭衣として、男性は横幅布衣として着用しました。獣の皮も重要な衣類でした。』



今回上記朝日新聞の紹介で奈良女子大の中沢隆教授が、纏向遺跡から1991年に出土した遺物の分析で「天蚕＝てんさん」であることを証明され。それを染色して「絳＝赤いろ」が出せる技術もベニバナの花粉の確認で証明された。

この記事に接して素人の考古ファンが立てた仮説が、こんなに早く学者によって証明されたことが嬉しく、考古ファン冥利につきた思いであった。

(2)中国地方山地での山繭採取

私は戦後、母方の親戚が製糸工場を経営し繭から絹糸を作っていた。湯気が噓（む）せ返る工場の中で、年配の大勢のおばさん達が指サックをして絹糸を撚り出している光景の中で育った。一種いやな蛹（さなぎ）の匂いが鼻を衝（つ）いた。

中国地方の山麓では山繭（カイコの繭と同じ形で色が薄茶）がクヌギの枝にぶら下がっているのが目に付いた。それを集めて、叔父さんのところへ、持っていけば、子供の小遣いには余るほどであった。大人も専門に集めているようであって、製糸すれば茶色であり金色に輝いた。一般のカイコの白い繭より高価なものようであった。私の幼少の頃の体験から古代に興味を持つようになって卑弥呼の魏への土産と重ねた。

(3)倭人伝の魏への贈り物は天蚕と漆

桑の木の葉からカイコ（家蚕＝かさん）は古代中国とギリシャを結ぶシルクロードで有名ですが、完全に家畜化された白い繭で今日まで綿々（めんめん）と繋がっています。

私の認識ではカイコや桑は半島から秦氏の技術集団が日本列島に持ち込んだと考えますが、繭を製糸にする技術が先行し桑と家蚕は後のことと思います。繭は山繭＝天蚕でした。古代人も衣食住は、身近な山野の自然から採取し活用しました。麻や葛（くず）の自生している植物からの織物と、山繭や小動物の皮を加工する技術は持っていました。

特に漆の技術は日本の方が大陸より古いとの説が定着しています。日本の先住民＝縄文人とその後の弥生人は海峡を挟んで大陸や半島との交流が活発で、金属加工（主に鉄や青銅器）稲作と関連技術を共有していました。海人族＝倭族の活躍です。

卑弥呼はその中から、当時も今もそうですが貴重な天蚕の黄金の絹と中国地方特産の今の備中漆を持参し魏の皇帝に贈りました。魏志倭人伝では絳青縑（こうせいけん）として当時の中国の言葉で伝えているのです。

(4)養蚕の思い出

私は戦後に山陰に育ったので、まだ養蚕が農家の一番の副業でした。母屋に続いて「養蚕場」があり、牛や馬は母屋の内庭で飼っていて家族同様に可愛がっていました。まさに家族の一員でした。蚕も家畜として飼われた最初で最後の昆虫です。小さい卵から孵った1齢から10時間程度の眠りを重ね5齢で蛹（さなぎ）繭を作りその中で蛹化（ようか）し完成する。



自然のおはなし カイコ 山陽 25.7.24

小さい時の蚕は柔らかい桑の葉を与えて、成長につれて食欲も多くなり竹の養蚕棚いっぱい桑の葉に音を立てながら食べていた。温度管理も大変らしく、室内は密閉され大人の真剣な様子が子供たちにも伝わってきた。食欲も旺盛になると、糞も多くその独特な臭いも忘れられない。

桑の葉もお仕舞いの頃には枝ごと採取してきて指先につけた刃物で素早く枝から葉を収穫していた。枝の片付け等が子供の役で外庭に山積みしておき、五右衛門釜のお湯の焚き火材として重宝していた。

その葉を採った残りの枝＝桑にとっては徒長枝は、確か皮を剥いで、和紙の材料に使ったと思うが子供で詳しくは覚えていない。桑と同種の一年草が麻で、麻の木の皮から麻布を紡いだ。

我々が中学生になる頃は、あれだけ大切にしていた養蚕用の竹棚も、風呂の炊き材に消えていった。若者は「金の卵」として都会に駆り出された。

桑の木には実が付き、赤実が熟すると黒くなり、子供の格好のオヤツであった。学校の帰り道、他家の桑畑で採取して食べると口元が黒くなっていて、一見して悪さがばれたが誰も咎める大人はいなかった。昭和 30 年代初めまでの集落の様子で、懐かしい。

実は桑の実は、今住んでいる岡山市中区のふれあいセンターの中庭に植えてある。当地が桑野の地名に由来して、気の利いた職員が植栽したのだろう。グランドゴルフの仲間と遊戯中に、自然と手が出て桑の実を食していると、私より年配の仲間が珍しそうに見ている。干拓地で育った彼らには養蚕の経験が無く、桑畑は存在しない、よって桑の実も知らないで育ったのだ。

懐かしいことは他にもある。蛹（さなぎ）は私たちの当時は一般に鶏や鯉の餌だったが戦時中は人間の食材だったと親から聞いた。稲穂が実る頃は蝗（イナゴ）が大量にいて、自宅に持ち帰って煎って食べた。今でもイナゴの佃煮が美食家に愛されているが、当時は子供のオヤツであった。

余談だが地球の人口が増えると究極の食材の一つに昆虫があるとの学説を耳にした。蛹（さなぎ）が絹の材料でなく、食材の時代になるかもしれない。

(5)まとめ

今では皇居で田植えと養蚕が皇室の伝統行事として伝えられ、一般の養蚕はGM（遺伝子組み換え）カイコに替わりつつあることが、朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事に掲載されていた。



朝日新聞の平成 23 年 11 月 28 日の特集記事

西暦 243 年に邪馬台国の卑弥呼が魏王に贈った絳青縑（こうせいけん）と称する絹が天蚕（山繭）であったとする私の仮説が今年の 5 月 31 日に学者によって証明された、意義は私にとって大きな出来事であった。

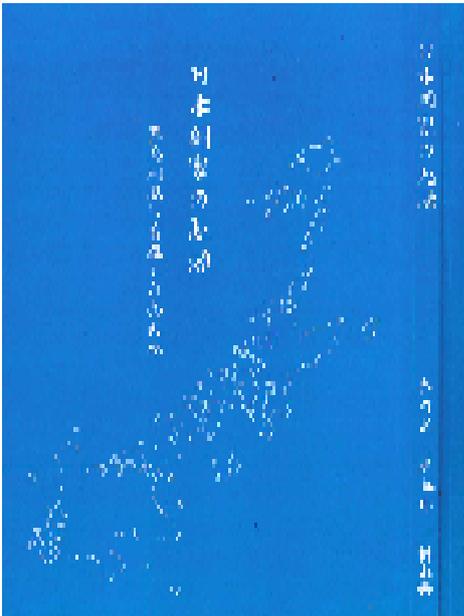
話は横道にそれたが、それも一興として懐かしく思い出した。

父の遺作書に接して 「浮かび上がってきたもの」

五島列島高天原説

会員 村山三枝子

『日本国家の起源—五島列島に実在した高天原』（松野尾辰五郎著）は、50年ほど前に書かれた本である。著者は、『古事記・神代篇』に出てくる沢山の神名が五島にある多くの地名と極めてよく似ていることに気づき、『古事記伝』（本居宣長）や『五島民俗図誌』（柳田國男監修）および『万葉集』、『神道祝詞』ほか多くの文献を引用するとともに、ことばの時代変遷および五島の民俗や言い伝えおよび五島の神社祭神の名を援用しながら、神代の物語が著者の故郷である五島列島で起きたことであると述べている。



編者注 村山三枝子氏が再版された本の表紙

（一）松野尾辰五郎の五島列島高天原説

著者は『古事記』に記載された幾つものテーマについて考察している。そのいくつかを紹介すると次の通りである。

①国生み神話

ひとつは国生みの話しである。『古事記』で

は本州など大八洲を生んだあと「^{きてのちかよりまし}然後還坐之時」の6文字が出てくるが、これまでの研究者はこの6文字の意味に気づかなかつたのだと著者は言っている。この6文字つまり“帰還するときに”、吉備の児島から始まり知呵島、両児島までの6つの島を生むのである。これはまさに伊邪那岐、伊邪那美の2神は西（五島列島の方）に向かって帰っていったということなのである。

黄泉の国の段で、伊邪那美神が火の神である迦具土神を生んで美富登を焼かれて死んだあと、^{あがり}殯斂に安置される場面がある。その場所を著者は富江（福江島）の部崎（へさき）の近くの洞窟で井穴と伝承されている場所としている。そして部崎は正しくは閑離（へさき。閑は竈のこと）、井穴は正しく齋穴であるとしている。そこで岐・美二神の争闘（死の本縁、死靈還魂）が繰り広げられるわけである。

そのあと伊邪那岐神は亡くなった伊邪那美神の穢れを祓うため、「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」で禊をし、その際に十八神が誕生する。上記“日向”について『古事記伝』では“ヒムカヒノ”と“ヒムカノ”の2つの解釈のうち本居宣長は後者を用いている。これに対し、著者は前者（ヒムカヒノ）の方が正しく日が向かうところ（＝西の果ての五島列島である）と解釈している。

②天孫降臨と国譲り神話

出雲の英雄・大国主神（国造りの神、農業神）と少名毘古那神（農業のヴェテラン）は日本国中に稲作りも指導して回っている。著者は柳田國男の「どこかに稲作の先生の巣があったはずだという」言葉や五島に伝承される踊りの呪言などをもとに、五島のチャンココ踊りの語源は佐乃神講（ツァヌココ）踊りであつて田の神の祭りであり、稲種と稲魂を分け与え稲に子どもを産ませるべく日本国中にしかけて（掛踊り）廻ったことにあるとしている。

やがて本州での稲作りや国造りで強大な力

を持つに至った大国主神（国ツ神）に対し、天照大御神と高木神は大国主神が有している国を天孫（天照大御神直系の神）に戻させることに、4回の試みのあと成功する（国譲り神話）。そしてこれら天孫一行は九州本土に移動するのである。（天孫降臨）。

そのルートとして『日本書紀』、『古事記伝』では“^{くしひ}穗日の^{ふたがみ}二上の^{あまの}天の浮橋より”となっているが、著者は、^{くしひ}穗日は岐宿（きしつ）のことであり、^{くしひ}二上は城ノ岳ではないかと考えている。そしてその後、魚津ヶ崎を經由し立小島から薩摩の笠沙岬に向かったとしている。

③日子穂々出見命

次に『古事記』では木花咲耶姫の段に移り、邇々芸命が木花咲耶姫に見合って火照命と日子穂々出見命（火遠理命）を生むことになる。いわゆる海幸彦と山幸彦の二人である。やがて山幸彦は海幸彦から借りた釣り針を失くし、龍宮城に行くことになる。著者は橋ノ浦の海神の宮は龍宮城だという『日本書紀』を引用しながら、種々の検討を踏まえてその橋ノ浦は若松瀬戸のことであると述べている。

(二)松野尾辰五郎説の傍証

以上、本書の中の多くの話題の中からこれらに絞って説明したのであるが、これは本書について私なりに調べていくうちに本書に記されていないいくつかの事柄に最近出会ったからである。それは、①出雲大社、②井穴、③禊ぎ、④日向、⑤チャンココ踊り、⑥天孫降臨での二上、⑦龍宮城にそれぞれ関わる話であった。これらについてお話ししたい。

①出雲大社

本書では伊邪那岐、伊邪那美の2神が国生みから帰った西の先は五島となっている。これとは別に私は出雲大社の神坐は西向きであるということが学研出版の雑誌で知った。つまり出雲大社に祀られている大国主神は、国譲りに際し「出雲に大殿を建てて自分の靈を祀ってくれ

るなら」との条件を天孫に出し、結果を得たのである。そして五島福江島にて余生をおくるのである。それゆえに西の方向（五島福江島）に神坐が向いていると解釈することができる。

②井穴(いあな)

永治克行や竹内清文によれば、井穴は五島列島の火山活動でできた溶岩トンネルであり、富江半島地域に複数個見られるという。本書では著者のいう齋穴は1か所のように読めるが、類似するものが複数存在するということはどのようなことか、今後ゆっくり考えたいと思っているが、少なくとも古代の人々にはこのような特殊な穴が強烈な印象を与えたのではないかなと思う。

③禊ぎ

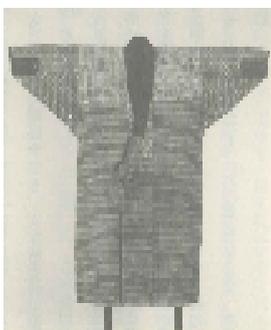
伊邪那岐神は亡くなった伊邪那美神の穢れを祓うため、「筑紫の日向の橋の小門の阿波岐原」で禊をしたが、著者は、禊のあとに生まれた神々の名が海岸沿いの地名と一致することも含め、禊は海で行われたと考えている。牧田茂によると五島では埋葬の式が済むと穴掘りの者が海にいつて身体や、埋葬に使った鍬などを洗ってくる潮蹴という風習があったという。このことも前述の禊が五島の海で行われたことと関係しているのではないかなと思う。

④日向

日向について著者はヒムカヒノとすべきとしていることは先に述べたとおりである。これに関して私は最近、日本地名研究所を訪ね『谷川健一全集』の一部を読んだ。その中で氏は「五島の島内に橋という地名が多いのに注目した」と述べている。そして「河務から三キロ離れた所に^{ひようがし}日向岸…という地名がある。日向岸は東に向いていて…。また有名な寄神貝塚と隣合わせに^{ひようらんだつ}日向崖と呼ばれる場所があつて、やはり東に向いている。」と述べ、「日向の橋の小門阿波岐原」との関係で見過ごせないと結んでいる。

実は五島に橘の木が多いこと、および日向の地名もあることは、この本の勉強会である「五島列島ドンザの会」において野崎 豊氏に伺っていたことでもある。

**編者注 「ドンザの会」は岡山歴史研究会の
勉強会グループ**



福岡市博物館所蔵のドンザ

私は禊ぎが行われた橘の小門の阿波岐原が五島列島であったという著者の解釈に、ますます同感するのである。なお、谷川氏の記事については永治氏も『五島雑学事典』の中で紹介し、またご自分の考えも述べておられる。

⑤チャンココ踊り

著者は前述のようにチャンココ踊りは田の神の祭りと言っている。最近私は本書とは別に著者による五島文化協会『浜木綿』への寄稿文を探しあてることができた。そこでは、「その稲作りの先生の巢である岐宿の男には、太古より男としての栄耀特権としての性風俗があった」と書き、また少しその具体的な話も書いている。『岐宿村郷土史』に記載されている「岐宿ナ良かこ女が通う、男寝て待つごつしよどころ」という俚謡を参考にしたものでもあった。

和歌森太郎は「五島では5月の半夏生^{はんげしやう}に麦団子を備える事があり、これを田の神と呼んでいるのは田の開拓祖先を地神としてまつた概念にもとづくかと思われる」と言っている。やはり田の開拓者が五島にいたのではないか思われる。

⑥天孫降臨での二上

天孫降臨における“二上山”について、現在

の城ノ岳を指すのではないかと著者はいつている。この城ノ岳は岐宿の南にあり、私はこの城ノ岳を手持ちの地図で調べ、それらしい感触を持った。それで大正6年発行の岐宿の2万分の1地図を取り寄せてよく調べてみると、城ノ岳の標高は216mでありその300mほど南にもう一つほぼ同じ高さの山があり、両者1対でラクダのこぶ状に読めるではないか。“二上山”はやはりここだったのだと思った。

⑦龍宮城

著者は、『日本書紀』の中の“橘ノ浦の海神の宮は龍宮城”との説明の中の橘浦とは若松瀬戸であると言っている。若松町がある若松島を地図で眺めていると、その北端の日ノ島のすぐ東の脇に‘龍宮小島’という小さな島が浮かんでいることに気付く。若松瀬戸の水路の中にあるわけではないが、水路の北側の出口近くに位置している。やはり古事記と何か関係があるのではないだろうか。

以上、本書の内容とは別に最近得た7件の情報を本書の内容と照らし合わせて述べさせていただいた。この本を理解しようと学びをひろげるほどに、関連する嬉しい資料に出会うこともできる。これからも、続けていきたいと思う。

編者より著書紹介

書名＝『日本国家の起源—五島列島に実在した高天原』

著者＝松野尾辰五郎 発行所＝丸善書店(株)

発行者＝村山三枝子（著者の次女）岡山市在住

発行日＝H24.9.27 復刻版第2刷補訂版発行

定価＝1500＋税 B5 160P

宗良親王と南朝の忠臣の

動向について

会員 井上秀男

1.美作国高坂氏と武田信玄からの書状

美作国英田郡英田町上山地区に「大芦高原雲海」という温泉施設があり、標高 400m 位で見晴らしの良い場所で、最近棚田の村おこしに若者達が集まって、活動し有名になっている。この上山地区には、上山神社があり、大足仲彦命が、大足（芦）の池を築いた威徳により祀る。中世まで大足宮、後に高津八幡、明治になって上山神社となる。

上山城主延原弾正忠景能が、太刀と鱧口を当神社に寄進している。高坂氏が数軒あって、この上山地区字淵尾の高坂孝氏（故人）宅に所蔵されている書状で、武田晴信（信玄）から高坂弾正忠昌信へ当てた書状です。



高坂孝氏宅に所蔵されている書状

この書状の内容は元龜3年（1572）12月22日、武田信玄と徳川家康が遠江の三方ヶ原で合戦をした後日の書状である。武田信玄の宿将高坂弾正忠昌信が、三方ヶ原合戦の時海津城にいて、上杉謙信の南下を防いだ功労にたいする感状の文書である。概要は「去る 22 日味方ヶ原、後詰め待ち入り軍算之事……加禄三百貫を恩賞として与える。依って忠勤の程を頼む」との内容で、書状の年月日が元龜3年甲12月28日と記され、合戦後6日後の書状です。高坂昌信は永禄4年（1561）8月の武田信玄と上杉

謙信の川中島決戦以来、海津城の城将として、上杉氏の南下を防備する重要な役目をもって、武田信玄に仕えた智将である。

美作の高坂宅にこの書状が伝わっているのには、それなりの過程があった。高坂昌信には二人の男子がいて、長男の高坂源五郎昌澄は武田勝頼に仕えて、天正3年（1575）5月21日の信長・家康連合軍に大敗し、長篠の合戦で戦死する。二男は高坂源五郎昌武で同じく勝頼公に仕え、天正10年（1582）3月天目山の合戦で、信長家康連合軍にせめられ武田勝頼は自刃し、武田氏は滅亡する。しかし高坂源五郎昌武は難を逃れ、武田家の再興を願って天目山の合戦の後、毛利家を頼って中国地方に下って来る。しかしこの頃、羽柴秀吉が高松城の水攻めの最中で、どうすることも出来なくて、美作国英田郡河会庄上山に潜居して居住する。高坂源五郎昌武が英田郡上山での高坂氏祖であると由来書に書いてある。



高坂氏由来書(著者蔵)

武田晴信からの感状を信濃から中国地方に下る時に大切に所持していたものと思われる。天正10年（1582）から5・6年後の頃、高坂源五郎昌武の長子、高坂藤一郎昌秀は足守陣家に仕えていた時、辻秀正の家臣で藤森幸左衛門右次（すけつぐ）よりの文書があって、その文書は作州真島郡石井ヶ城主（現在の真庭郡）辻（つじ）新次郎秀正の領分の内、備中賀夜郡上高田村（現在の岡山市足守地区）に二百石を宛がう

というもので、足守陣家の高坂藤一郎（昌秀）殿と中島徳佐衛門殿、2名へ連名で書かれ、天正16年（1588）11月2日の年月日の記された文章である。

辻秀忠は真島郡石井ヶ城を築いて居城にしていた。この秀忠が作州の辻氏の祖である。美作後南朝の忠臣、原田佐秀の子孫は式部少輔に任ぜられ、越尾（こしお）に居住し越尾を姓としたが、伊賀守平政の代に桓武（かんむ）平氏の末葉、稲荷山城主原田宗家（そうけ＝本家）河内守忠平の女婿となり、菅家と平氏の末葉が婚姻で結ばれた。伊賀守平政の二男、伍郎二郎秀忠は祖父越尾持近（もちちか）の家督を継いだ。永享11年（1440）公命により、真島郡鹿田郷に館を構えた植木惣十郎を討ち、地頭職となり居住地を鹿田郷辻に定めたので辻姓に改めた。

元弘の変には菅家七流の武士が後醍醐天皇を守り、次いで京都回復の勅命を拝して一族三百余騎が京都猪熊に戦い、辻家の祖である原田彦三郎佐秀は菅家七流の一族27人と共に討死したことは、太平記巻第八及び梅花余香18頁～21頁に記されている。

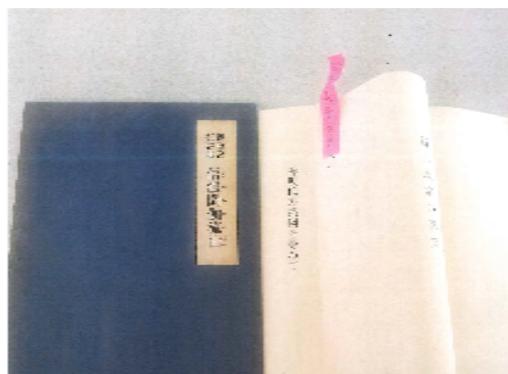
2. 宗良親王と南朝の忠臣香坂四郎高宗

宗良親王は後醍醐天皇の第八皇子で応長元年（1311）に誕生された。生母は大納言為世の女、従三位為子である。20歳の時に妙法院へ御入室ありて一品の宮、天台座主法親王尊澄と称されていたが、延元2年（1337）の春に還俗されて信濃宮宗良親王と称された。

父の後醍醐天皇は元弘元年（1331）の元弘の変で再度、倒幕を企てるが失敗し、隠岐島に流される。その後隠岐から帰った天皇は建武政権を立て、独裁的な天皇親政を始めたが、3年で崩れ、建武3年（1336）12月後醍醐天皇は大和国、吉野に逃走して吉野の南朝と京都の北朝とが分裂して南北朝時代になる。後醍醐天皇は吉野に居住して3年後の延元4年（1339）8月

吉野の地で52歳の生涯を閉じられる。後継者は義良（のりよし）親王で第97代後村上天皇が即位され、改元して興国の年号に変わる。

宗良親王は南朝回復を願っておられた。興国5年（1344）信濃国伊那郡大河原上蔵（わぞう）の地に、南朝の忠臣で美作守香坂四郎高宗の館（やかた）に入られる。宗良親王33歳の時であった。大河原城は香坂四郎高宗の居城である。香坂氏は信州佐久郡の香坂の地名から姓としている。神坂とも称し、望月氏の始祖滋野（しげの）から分流して、佐久地方に住していた氏族と文献にあり、香坂四郎高宗の父小太郎心覚は、建武3年（1336）正月公家方に応じて義兵を挙げたが、守護司小笠原経義、村上信貞、高梨経頼等の勢力に負け城を捨てて、伊那郡大河原に逃れたと「市河文書」に見える。香坂氏の紋章は十六弁の菊花紋を使用している。



著者所蔵の「信濃関伽流山」

長野県佐久郡三井村香坂西地にある関伽流山（あかるさん）明泉寺の過去帳には宗清入道覚法、小太郎入道心覚、美作守四郎高宗の名前はあるが、年代は不明な点があるとしている。香坂四郎高宗から数代の後に、香坂弾正筑前守宗重が更科郡の牧の島城主であった。その後武田信玄に仕えていたが、永禄4年（1561）に川中島に陣した時、香坂宗重が上杉氏に通じたとの疑いをもって、信玄に誅せられた。しかし武田信玄は名家の香坂氏が断絶するのを憂いて、宗重の一女を海津城代春日昌信に娶らせて、そ

の後を継がせて高坂弾正忠昌信と称した。高坂弾正忠昌信は武田信玄、勝頼と父子二代に仕えた武田氏の宿将である。

3. 武田信玄と高坂弾正忠昌信

高坂昌信は初名を春日虎綱と名乗っていた。武士の出自ではなく石和（伊沢＝いさわ）の豪農で春日大隈（おおすみ）の子である。春日源五郎、春日弾正忠正忠、高坂弾正忠昌信と名を変えている。高坂昌信は天文11年（1542）の16歳の時に、信玄公の奥近習として館に出仕する。昌信は美童で信玄公の寵童（ちょうどう）であったと伝えられている。

高坂昌信は天文21年（1552）8月26才の時、信州攻略として、安曇（あずみ）郡小岩岳城（穂高町）の合戦で一番乗りして、この功勞によって侍大将に任じられ、春日弾正忠正忠と改名する。信玄公から信州小諸（こもろ）の城を預けられ城代として、佐久地方を守り甲越決戦の時には、前線基地となった海津城にて、北越の上杉氏の動向の押さえとして尽力した。

特に元龜3年（1573）12月22日の徳川家康、織田軍の連合軍と武田氏の合戦＝三方ヶ原の合戦で、昌信は海津城にて上杉謙信の南下する押さえとして海津城を守っていた。三方ヶ原の合戦で大敗した家康は浜松城に逃げ帰った。その時武田氏の宿将は一気に浜松城の家康を討取る意見を進言するが、高坂昌信唯一人「深追いは避けるが肝要」と信玄公に説得すると、その進言を受け入れたと伝えられている。三方ヶ原の合戦が終わってすぐ年号は天正元年になる。信玄公の体調も悪く、全軍甲府へ引きあげることになり、しかし途中の信州駒場（こまば）長野県下伊那郡阿智村で信玄は天正元年（1573）4月12日53才の生涯を閉じる。

その後天正3年（1575）5月信長、家康に攻められる長篠の合戦で武田勝頼は大敗する。天正4年（1576）4月信玄の死が公表、高坂弾正忠昌信が家臣を代表して葬儀を執行されたと伝えられている。信玄公死去の後、若い武田勝

頼は老臣の意見も聞く意志もなく高坂昌信は、遠く離れた海津城で武田氏の行く末を案じていた天正6年（1578）5月11日海津城にて52才の生涯であった。その4年後の天正10年3月家康、信長の軍に天目山の合戦で敗北し、武田勝頼は自刃して、武田氏は滅亡する。高坂弾正忠昌信の墓地は海津城の近くで長野県松城町の明德寺に埋葬されている。

4. 新田義宗の拳兵と宗良親王

後村上天皇の正平7年（1352）2月新田義貞の三男義宗は、次兄義興と義貞の弟脇屋義助等と協議して、宗良親王を信濃より上野に迎え足利氏討伐の義兵を挙げ、滋野（しげの）一族、香坂四郎高宗、伴野十郎等が参戦したと太平記の中に見られ、義宗の兵と足利尊氏の軍と武蔵の小手指原で、正平2年2月28日決戦があつて宗良親王方は敗退する。

その後親王は、信濃、越後にと移られ3年を経て正平10年（1355）4月信濃に入られ諏訪一族、仁科、知久、栗田、三輪氏等の官方の諸氏を集め、小笠原長亮に対抗しての兵を起こした。宗良親王は諏訪上社の矢島正忠を大将として、親王自ら軍を率いて塩尻峠を越えて府中へ進撃し、敵軍は小笠原長亮を総大将と家臣の坂西、麻生、赤沢の諸氏と正平10年（1355）8月20日両軍は激突する。場所は東筑摩郡（長野）の桔梗ヶ原で合戦し宗良親王方の総大将矢島正忠は流れ矢にあたって倒れ、敗北する。宗良親王は天授6年（1380）頃信濃を出発し西上せられ、河内国山田庄に閑居され、その後遠江の井伊谷（いいのや）にて元中2年（1385）8月10日73歳にての生涯を閉じられた。遠江国引佐郡井伊谷に埋葬されている。

今回の“きび考”の寄稿文を書くに当たり第2回歴研サロンが7月23日に開催され、雪吉政子さんの雪吉家の由来についてお話を聞かせてもらい、その中で後醍醐天皇の第八皇子の宗良親王の子供に尹良（ゆきよし）親王がいて、

この尹良親王を祖に雪吉との姓になったと聞かされ、大変に興味を深く聞かせてもらった。

私は井上氏発祥の地が、信州上高井郡井上村で、色々と長野県関係の郷土史本を集めています。その中で『信濃関伽流山』（しなのあかるさん）という本の中に（前掲写真参照）宗良親王や南朝の忠臣として宗良親王に仕えた、香坂四郎高宗についての文面を思い出し、本を探し出して、再度目を通し今回の寄稿文の参考とさせてもらった次第です。関伽流山は山号で明泉寺という寺があり、場所は長野県佐久市（旧）三井村香坂西地にあります。

香坂四郎高宗は南朝の忠臣として宗良親王に仕え高坂弾正忠昌信の二男は、天目山の合戦の後、武田氏の再興を願って美作国へ来て、英田郡河合庄上山へ居住する。この河合庄には南朝の忠臣、渋谷一族が居住していた所でもある。信州から高坂氏が美作国へ南朝の子孫がいることを知って、来住したとも考えられます。苗字、姓氏、家紋、地名についても、それぞれの由来と歴史が秘められ、各家に伝わる伝承についても目を向ければ、色々なことを知ることができる。武田晴信（信玄）から高坂昌信へ宛てた一通の書状から、高坂氏の歴史と宗良親王に仕えた、南朝の忠臣として活躍した諸氏の動向について触れて見た次第です。不思議な縁の重なりに感動！！

参考文献 大日本地名辞典Z(吉田東伍著)

英田郡私考 日本城郭体系

信濃関伽流山 系図綱要 歴史読本

“やきもの”の話

陶磁器の分類、粘土とは

会員 延原勝志

色々な遺跡・古墳・廃寺など新たに見つかる歴史的遺産は多くあります。その中で発見される陶器（陶片）などが、その時代特定の「決め手」となります。土器を含め我々は、“やきもの”と呼んでいます。現代の“やきもの”である陶磁器を分類して見ます。

岡山に住んでいる我々は“やきもの”と言えば、備前焼を思いうかべる方々が多いと思いますが、有田・信楽・丹波焼、また瓦とか土器など様々な“やきもの”があります。それらは大きく分けて土器・ニューセラミック・磁器・陶器・炆器（セッキ）に分かれます。この分類については諸説ありますが、私はこの分類がわかりやすいと思います。



自分の窯の前で

まずは土器について説明します。陶土（粘土）を素材とし、軟質系と硬質系に分かれます。軟質系は縄文・弥生土器、土師（はじ）器など、窯で焼いていない器（うつわ＝野焼による焼成）です。

四世紀頃に朝鮮半島より須恵器が日本各地に伝わり、窯で焼く“やきもの”が出来て着きました。窯で焼くことにより、より硬く締まる陶器、これらは硬質系の土器と考えます。

新しいものではニューセラミック。錆びない包丁・はさみなど、クレサンベールの商標でも販売されている京セラの宝石・人口ビー・ダイヤなどですが、“やきもの”に入れて良いのか否かは説により、違いがあります。

そして**磁器**、基本的には陶石（岩の中の長石などが粘土化し、鉄化合物が洗い流されたもの）を素材にしています。軟質系は便器・洗面器などで、叩くと「コンコン」という鈍い音がします。硬質系は有田焼・九谷焼などで、石などで叩くと「チンチン」という高い音がします。これは素材の耐火度と焼成温度の違いによるものです。」

最後に**陶器**。これが一般に広く普及している“やきもの”です。陶器は磁器と違い陶土を素材にして、釉薬を掛けたものが多いのです。陶土とは花崗岩が風化して堆積したものです。風化して先ず堆積した粘土を一次粘土といいます。

産地でいえば、美濃・唐津・萩・信楽・伊賀焼などです。蛙目（ガイロメ＝石英粒子）が多く含まれます。

その一次粘土がさらに風化が進み堆積したものが二次粘土です。樹木等が腐食されながら堆積されてゆきますので、粘性が強いことが特徴です。（木節粘土ともいいます）

一次二次粘土を使う“やきもの”は釉薬を使います。素地のまま焼き締めたら水が漏れるので、水漏れを防ぐために釉薬を使うのです。釉薬とは木の灰・石の微粉などを調合し約1200℃（±約100℃）の高温で熔けるガラス質のものです。これを器の表面に施すことにより、水漏れが止まるわけです。例外として信楽、伊賀焼などは釉薬を使用せず、焼締めたものもあります。昔から「伊賀＝信楽の七度焼き」と言われるのは、七回程焼くことによって、水漏れを止

めたという話しです。

そしてまた、二次粘土が風化され、流されて海岸、または海の中に堆積し、海の中のアルカリ分（ソーダ）微生物などを含み再び地上に隆起し風化したものが、沖積粘土、つまり炆器粘土です。**炆器**とは鉄分やその他の不純物を多量に含む故に、収縮率が大きく焼成時に色が付きやすく、また耐火度も低い事が特徴です。



延原夫人の作品



亀甲模様(考古吉備模様)壺の作品

備前のヒヨセ土（田土）、常滑の朱泥、鳴門の大谷焼の田土などです。備前焼の場合吸水率0.2%（24時間）程です。若干目には見えない程度の水漏れをしますが、その事により器の表面が冷やされ気化熱がおこり内部の水も冷やされることにより、水が腐りにくくなりますので、備前焼の花瓶は花持ちが良いといわれています。

また徳川家康が天下を取った後「備前は大甕（おおがめ）を作るな！！」というお触れを出しています。大甕を城の中に大量に備え水や穀物を、貯蔵できなくしたのではないかと私は考えています。また「備前焼の歴史」についてレポートさせて戴きます。

編者注 筆者は備前焼伝統工芸士で備前市文化財保護指導委員であります。

氣比神宮末社 擬領神社と

黄蕨(吉備)国

会員 丸谷憲二

1 はじめに

吉備国の語源「黄蕨」を調査していて、黄蕨(吉備)国と越前国が強く結びついている事実を発見した。氣比神宮(福井県敦賀市曙町)末社擬領(おおみやつこ)神社と化氣神社(岡山県加賀郡吉備中央町案田)である。祭神より黄蕨(吉備)国との関係を考察したい。

2 氣比神宮の祭神と末社 擬領神社

越前国一宮・北陸道総鎮守、氣比神宮の祭神は、伊奢沙別命(いざさわけのみこと)を主祭神として7柱を祀る。仲哀天皇(ちゅうあい)・神功皇后(じんぐう)・応神天皇(おうじん)・日本武尊(やまとたけるのみこと)・玉姫命(たまひめのみこと)・武内宿禰命(たけのうちのすくねのみこと)である。

末社に擬領神社がある。擬領神社の祭神は武功狭日命(たけいさひのみこと)である。武功狭日命は吉備臣祖稚武彦命の孫である。稚武彦命(わかたけひこのみこと)で吉備国と直結する。



擬領神社



氣比神宮

2.1 擬領神社の擬領(おおみやつこ)とは

氣比神宮のHPの説明が下記であるが、擬領(おおみやつこ)の意味が不明である。

擬領は「おおみやつこ」とは読めない。

擬領神社[おおみやつこ]

「社記に武功狭日命(たけいさひのみこと)と伝え、

一説に大美屋都古神(おおみやつこのかみ)又は玉佐々良彦命(たまささらひこのみこと)とも云う。

『奮事紀』には「蓋し當國國造の祖なるべし」と載せてある。」

「おおみやつこ」とは、「大領」のことである。

『日本国語大辞典第二版第2巻』

「おお-みやつこ【大領】[名] 律令制の郡司(ぐんじ)の長官。少領、主政、主帳を指揮する。大郡、上郡、中郡に設置。」

『日本国語大辞典第二版第8巻』

「たい-りょう【大領】[名] (「だいらょう」とも)。令制で郡司の長官。在地の有力豪族を任用する。おおきみやつこ、こおりのみやつこ。郡司。」

「大領」とは、郡司(ぐんじ、こおりのつかさ)のことである。

『日本国語大辞典第二版第4巻』

「ぐんじ【郡司】[名] (「ぐんし」とも)。令制下の地方官。国司の下で一郡を統治した。大化改新(645年)に始原があるが、大宝令以後は大領・少領・主政・主帳の四等官で構成される。郡司は以前の国造の系譜を引く現地の豪族が優先的に補任され、終身官で代々世襲された。これは律令制の他の官職に比べ、極めて顕著な特徴である。郡職。」



角鹿神社

『国史大辞典4』

「ぐんじ【郡司】 律令時代に国の下級地方行政組織であった郡の官人の総称。大領・少領・主政・主帳の四等官より成るが、狭義には大領・少領のみを指し、これを郡領ともいった。令制は郡を五等級に分けて定員を定めているが、郡の規模の縮小、軍事的機能の軍団への移譲などにより、郡司の権限は大きく削除された。また正員のほか員外郡司、権任郡司、擬郡司などがあり。」

「擬大領」は正式な役職名である。擬領とは「擬大領」のことである。

「擬領の正確な表記は、擬大領である。擬郡司が擬大領である。擬大領の名前は、『古事類苑 官位部二』に多く収録されている。「郡司擬大領外正七位下忍海連法鷹」「擬大領正七位下難破忌寸」「対馬嶋下縣郡擬大領外少初位下直氏成」「擬大領正七位上依知秦成益」「副擬大領外正七位下依知秦公名手」等々。」

甲斐国一宮浅間神社では「八代郡擬大領、社家の祖」と正確に伝承されている。

甲斐国一宮 浅間神社 境内末社「真貞社」 八代郡擬大領

「真貞社とは甲斐国一宮 浅間(あさま)神社(山梨県笛吹市

一宮町一ノ宮 1684)の境内末社である。祭神は伴直真貞公である。伴直真貞公とは、貞観 6 年(864 年)富士山噴火時の八代郡擬大領であり、社家の祖である」



擬領(おおみやつこ)神社とは『擬大領神社であり、祭神は武功狭日命である。社家の祖である。『先代旧事本紀大成経 国造本紀』に「角鹿國造」と記録されている。』

『先代旧事本紀大成経』国造本紀

「角鹿(つぬが)国造 高穴穗宮朝、御代黄蕨臣祖若武彦命孫建功狭日命、任定二賜国造一」

2.2 稚武彦命

稚武彦命は孝霊天皇(こうれい)の皇子で、子に吉備武彦命(きびのたけひこ)がいる。記紀に下記の記録がある。

『古事記』孝霊天皇段

「大吉備津彦命と若武吉備津日子命(わかひこたけきび あひたぐ はりま ひかは さき つひこのみこと)とは、二柱相副ひて、針間の氷河の前

いはひべ す ことむ
に忌瓮を居ゑて、針間を道の口として、吉備国を言向
やは
け和したまひき。」故、此の大吉備津彦命は、吉備の上
つ道臣の祖なり。次に若武吉備津日子命は、吉備の下つ
道臣の祖
彦五十狭芹彦命(ひこいさせりひこのみこと)。亦の名
は吉備津彦命。…亦妃緇某弟(またのみめはへいろど)、
稚武彦命を生む。「弟(いろど)稚武彦命は、是吉備臣(き
びのおみ)の始祖(はじめのおや)なり。」

3 化氣神社

吉備国に化氣神社がある。「氣比神宮」の「氣比(けひ)⇒化氣(けぎ)」、「比⇒化」、「角鹿(つぬが)⇒鹿角」と変化している。化氣神社は備前国津高郡上田村案田(岡山県加賀郡吉備中央町案田)化氣山に鎮座している。創建は養老年中(717~723)である。祭神は大和漆上郡春日大明神4柱「武甕槌神、齋主神、天兒屋根神、比賣大神」と伊奢沙和氣神の5柱である。第十代崇神天皇の十年孝霊天皇の皇子大吉備津彦命四道将軍の一員として吉備国に派遣。異母弟若日子武命と共に針間(播磨)国から本宮山の峯に来られた。化氣山山上に御食津神(伊奢沙和氣神)を祀られた。氣比神宮の主祭神である。化氣神社に鹿の角の彫刻が多くある。本宮山への登山道に「旭川源泉」の湧水がある。



化氣神社



鹿の角・彫

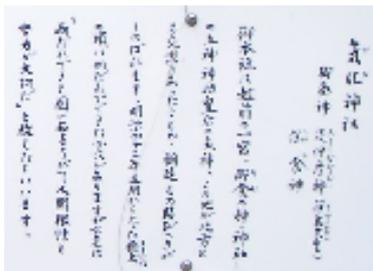
4. 豊原北島神社の境内摂社 氣比神社

『岡山県神社誌』に収録されている氣比神社は、豊原北島神社(瀬戸内市邑久町北島)の境内摂社のみである。祭神は応神天皇・神功皇后・比め大神・豊原北島神である。

境内摂社・氣比神社の説明に「祭神 足仲彦神(たらしなかつひこ・仲哀天皇)・保食神。この地が北方とも交流があったことや、朝廷との結びつきがしのべれます。」とある。氣比神社の祭神名を保食神と品陀和氣命(応神天皇)の父、足仲彦神(仲哀天皇)としている。



豊原北島神社



氣比神社

5 『備前吉備津彦神社縁起』と

『備前吉備津彦神社旧記断簡』

『備前吉備津彦神社縁起』延宝丁巳(延宝5年・1677)朱印に、「山陽道 備之前州 一品宮者、人皇第七代 孝靈天皇 第三之皇子 五十狭芹彦命(いさせりびこ)也、又名 吉備津彦命、母謂細媛命。一品 吉備津彦大明神 併相殿神 吉備津武彦命、孝靈天皇三世之孫也」とある。『備前吉備津彦神社旧記断簡』に、「孝靈天皇三男三女 第一孝元天皇、第二越前一宮、第三備中一宮、長姫宮、第一備前一宮、第二尾張宮、第三讃岐一宮、備後一宮一門タリ」とある。第二越前一宮より氣比(けひ)神宮との関係が確認された。『備前吉備津彦神社縁起』は、五十狭芹彦命と『日本書紀』による表記がされている。

5.1 氣比神宮旧本殿内陣の桃太郎像



戦災で焼失した旧本殿内陣の柱に桃太郎の彫像があった。髪を美豆良(みずら)に結び、扇を手にひれを両肩から掛け、舞うような姿で桃から現れる。美豆良に注目したい。美豆良は古墳時代の男性埴輪に見られ、茨城県武者塚1号墳(7世紀後半)から左側のみ、ほぼ完全なミズラが出土している。ミズラは大陸の北方文化とされている。この桃太郎像については氣比神や氣比社の成立にも関わる推測説がある



とされている。氣比神宮“桃太郎誕生地”説がある。「桃太郎像」は慶長19年(1614年)福井藩祖結城秀康が寄進した本殿内陣の柱に彫刻されており、氣比神宮の桃太郎が最古の桃太郎像である。『備前吉備津彦神社旧記断簡』の「第二越前一宮」との関係と推定している。

5.2 氣比神宮・女桃太郎説

桃太郎像の衣装が平安時代の女房装束(しょうぞく)だとする女桃太郎説がある。十二単(ひとえ)は皇室の正装であり、平安時代の女房装束をもとにしている。檜扇の手もとの袖のあたりを見ると3枚ほど重ね着をしている。十二単であると推定できる。髪飾りから女性であると推測できる。髪型は、上の方は髪を結っているような、そして下の方は髪を結っていないような感じである。これは奈良時代の女性の髪型に近い。右手に檜扇(ひおうぎ)を持っている。ヒノキの板で扇子(せんす)を作ったものである。檜扇も平安時代の女性の正装条件である。

女桃太郎説のモデルは誰か、吉備国の住人であれば吉備津彦命の姉の名前、ヤマトトヒモモソヒメを連想する。倭迹迹日百襲媛命は岡山神社の主祭神で、讃岐国一宮・田村神社の主祭

神でもある。倭迹迹日百襲媛命の気比神宮滞在を記念に残す為の桃太郎像となる。倭迹迹日百襲媛命は大物主神(大神神社の祭神)の妻となる。箸墓古墳は、宮内庁によって第7代孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命の墓として管理されている。この古墳を卑弥呼の墓とする研究者も多い。

5.3 気比神社伝承と桃太郎伝説

福井県には、気比神宮の他に気比神社が10社ある。気比神社(福井県丹生郡越前町気比庄)は気比神宮の勧請社とされ、福井県内でも屈指の歴史を持つ古社である。現在の宮司は角鹿尚計氏である。敦賀の地名説話に登場するツヌガアラヒトの子孫である。初代の角鹿国造から63代目、本家気比神宮の島家より分家して13代目にあたる。

『鯖江精機通信 創刊春号No.1 特集 気比庄』に、「角鹿家の先祖キビツヒコは、桃太郎伝説の桃太郎説もあり、気比庄には特異な桃太郎伝説があったらしい。(気比は「きび」と読むことができる。)」とある。

(角鹿尚計氏は、福井市立郷土歴史博物館副館長。2002年角鹿国造家を継承し宮司就任)

6 突厥国と敦賀

武智鉄二氏の『突厥国からの渡来人説』を紹介する。

① 「テュルク族(突厥国)の王は可汗(カカン)、王妃は可賀敦(カガトン)と呼ばれる。可汗は加賀国(石川県)の語源をなすものではないだろうか。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのまま敦賀になってしまう。」とし、「テュルクの転化と考える他はない。そうでなくては、縄文後期の製鉄遺跡の説明がつかない。」

② 日本へ製鉄技術が渡来し、一番古い登り窯は石川県加賀市豊(ゆたか)町の瓢箪池二号炉(BC500~300)とされ、同一年代の鉄遺跡が福井県金津(かなつ)町細呂木(ほそろぎ)駅製鉄跡I(BC550~370)である。年代測定法は炭素定着法で

ある。「福井県・石川県に高度の製鉄文化を担ってテュルク人(突厥国からの渡来人)が定住したことは、ほぼ間違いない。」

③ 『旧唐書鉄靺鞨』に、「鉄靺鞨(てつろく)は匈奴から別れた種族である。突厥の勢力が強力となってから、鉄靺鞨の諸部族は分散し、その部衆は、次第に弱小となった。唐の武徳年間(618~626)の始めのころ、15の諸部族が漠北に散在していた。」とあり、その中に骨利幹(こつりかん)がある。「骨利幹が俱利伽羅峠(くりからとうげ)の語源と思う」。

俱利伽羅峠は、石川県河北郡津幡町と富山県小矢部市(おやべ)との県境にある峠である。宝達(ほうだつ)丘陵の南端にあり、標高260メートル。両県を結ぶ交通の要地として古くから開け、604年(推古天皇12年)の開道と伝えられている。

7 渡来人の日本流入経路

武智鉄二氏の「異民族の日本流入経路5説」を紹介する。

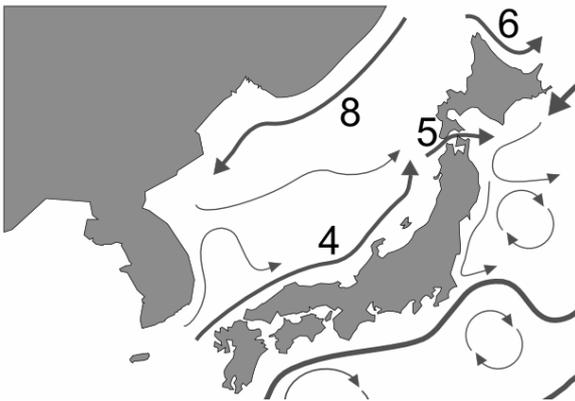
- ① 天山北路から南シベリアにかけて居住していた突厥系(古代トルコ系民俗)のうち鉄靺鞨に属する骨利幹部族(あるいは複数の部族。鉄靺鞨は35部族よりなる。)が、日本海を横断して北陸方面へ、紀元前3~400年頃、冶金術(鉄器文化)を伝来する。
- ② 漢民族の中でも最も純粹に原中国民族系である華夏系(中原河北系)民族が、紀元前200年頃、水田稲作農耕技術を持って、渤海湾から日本本州西端部(現在の山口県)へ渡来。
- ③ 中国の朝鮮植民地総督である帯方郡吏(太守)が、北九州の伊都付近に都督府を置き、卑弥呼の女王国と結んで倭の植民地化を計る。起源0年頃のことである。
- ④ 馬韓・弁韓・辰韓のいわゆる三韓のうち、弁辰系の部族が末盧(松浦)付近を占領して、弁辰の領土とする。また、韓の北隣の民族「濊」が、同じ頃日本へ進駐する。これが紀元50年ごろで、いわゆる天孫民族の日本征服がこれにあたる。

- ⑤ 宗谷海峡を渡って北シベリアの民族が侵入して日本の東北文化の基礎を築く。砂鉄生産の特殊技術である「たたら製法を伝来したのは、この種族(タタール・韃靼系)と考える。

8 若狭(ワカサ)の語源とリマン海流

福井県若狭地方は古代日本の先進地域である。若狭(ワカサ)の語源に、朝鮮語のワカソ(往き来)説がある。

リマン海流8を利用し、古代から大陸の文化が朝鮮半島を経由し日本に伝来した。「リマン」とはロシア語で大河(アムール川)の河口(三角江)を意味する。サハリン(樺太)の南西から沿海州に沿うようにして朝鮮半島の北東(北緯40度)までの海流である。間宮海峡付近からユ



ーラシア大陸に沿って日本海を南下する海流(寒流)がある。日本海を北上する暖流の対馬海流が北上するにつれ冷やされ、アムール川の淡水と混ざり、南下する。

9 まとめ

『続神道体系』収録の『先代旧事本紀大成経』の黄蕨国との記録を「突厥国からの渡来人が建国」と解説している。『先代旧事本紀大成経・卷第十八 神皇本紀上卷下』に、吉備津彦命は、「次彦五十狭彦命、亦名黄蕨邦彦命、黄蕨臣等遠祖也、」と記録されている。

- ① 平安時代中期に作られた辞書『和名類聚抄(わみょうるいじゅしょう)』の黄蕨国の説

みは、備中(吉備乃美知乃奈加)、備後(吉備乃美知乃之利)は同一であるが、備前(岐比乃美知乃久知)のみが異なっている。氣比神宮の比の字使用に注目している。

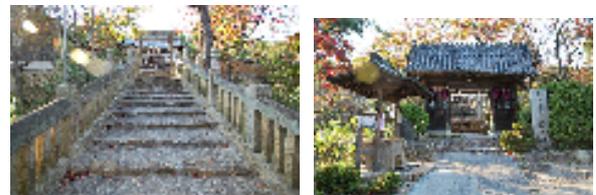
- ② 末社擬領神社の祭神は武功狭日命(たけいさひのみこと)である。武功狭日命は吉備臣祖稚武彦命の孫である。稚武彦命で吉備国と直結する。

- ③ 氣比神宮旧日本殿内陣の桃太郎像に注目したい。女桃太郎説のモデルは誰か、吉備津彦命の姉のヤマトトトヒモモソヒメを連想する。倭迹迹日百襲媛命は大物主神(大神神社の祭神)の妻である。宮内庁は箸墓古墳を倭迹迹日百襲媛命の墓として管理している。

- ④ 大吉備津彦命は伝説上の人物であるが、武功狭日命は擬大領職であり実在の人物である。

- ⑤ 「テュルク族(突厥国)の王は可汗(カカン)、王妃は可賀敦(カガトン)と呼ばれる。可汗は加賀国(石川県)の語源をなすものではないだろうか。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのまま敦賀になってしまう。」という武智鉄二氏説は正しいと考える。

- ⑥ 吉備津岡辛木神社(キビツオカカラキ・岡山市中区海吉)の祭神、吉備若武彦命が稚武彦命である。古くは吉備明現宮と呼ばれていた。



吉備津岡辛木神社

10 謝辞

平成22年4月30日に若狭哲六先生と片山伸栄氏に化氣神社を御案内いただいた。平成22年6月16日に野崎豊先生に豊原北島神社の境内摂社 氣比神社を案内していただいた。敦賀訪問前に辻野清勝氏(『本州鞍部の町 敦賀の歴史』)に敦賀の調査方法について教示を

えた。平成 22 年 10 月 21 日に擬領神社の調査の為、気比神宮を訪問し、桑原宏明氏(権禰宜)に「擬領」について質問した。「そんな難しいことは質問しないで下さい。」との回答だった。平成 23 年 2 月 26 日に大井 透氏より「擬領神社わかりました。正確には擬大領。」とのメールを戴いた。擬大領と大領との関係も明確にすることができた。

私の出生地は石川県小松市大領中町である。「大領の意味は」という子供の時から疑問が漸くとけた。備前西大寺のルートとされる周防国観音霊場、二井寺山極楽寺(山口県玖珂郡周東町神幡)の 1766 年の「新寺山由来記」に、「当山ハ聖武天皇ノ御宇天平年中ニ当国玖珂ノ大領秦皆足朝臣ノ草創ナリ 天平 16 年(744 年)」とある。これも大領の記録である。

11 参考文献

- 『北陸道総鎮守 気比神宮』<http://kehijingu.jp/>
『気比神社七座』
<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/300101.html>
『甲斐国一宮 浅間神社』<http://asamajinja.jp/>
『日本の神々-神社と聖地 第八巻 北陸』1985 年
白水社
『改訂増補 日本神名辞典』平成 13 年神社新報社
『吉備津神社』藤井駿 昭和 48 年日本文教出版
『日本国語大辞典 第二版②』2001 年 小学館
『日本国語大辞典 第二版⑧』2001 年 小学館
『日本国語大辞典 第二版④』2001 年 小学館
『国史大辞典 4』昭和 49 年 吉川弘文館
『古事類苑 官位部二』昭和 9 年古事類苑刊行
内外書籍(株)
『吉備津彦神社史料』文書篇 昭和 11 年国幣小
社吉備津彦神社社務所
『福井県史通史編 1 原始古代』平成 5 年福井県
『敦賀の歴史』平成元年 敦賀市史編纂委員会
敦賀市役所
『氣比宮社記』昭和 15 年 官幣大社氣比神宮
『化氣神社』

- <http://websakigake.sakura.ne.jp/06-134.html>
『日本古典文学体系 1 古事記祝詞』昭和 33 年
岩波書店
『日本古典文学体系 67 日本書紀上』昭和 42 年
岩波書店
『福井県の地名日本歴史地名体 18』1981 年平凡社
『岡山県神社誌』岡山県神社庁
『古代出雲帝国の謎』武智鉄二平成 2 年 祥伝社
『先代旧事本紀大成経(一)(二)(三)(四) 続神道体系
論説編』平成 11 年 小笠原春夫校注 神道体系
編纂会
『平成二十年度特別展 気比さんとつるが町衆
気比神宮文書は語る』平成 20 年敦賀市博物館
『美作国の成立事情』狩野 久(奈良文化財研究所)
2013.8.11 岡山県立博物館講演
『日本で最も古い「桃太郎」が居ました。気比神宮』
<http://www.lococom.jp/article/view/2451926/>
『大発見! 気比神宮・桃太郎』
<http://yoshi-bay.com/index.php?id=47>
『鯖江精機通信 創刊春号No.1 特集 気比庄』平成 20
年 6 月 鯖江精機広報委員会鯖江精機(株)
福井県丹生郡越前町気比庄 22-8
<http://www.sabaeseiki.jp>
『桃太郎と邪馬台国』前田晴人 2004 年 講談社
『気比神宮の桃太郎は女だった』
<http://ameblo.jp/kodaitantei/entry-10279306964.html>

連載＝四国八十八ヵ所めぐり

「歩き遍路の旅」6

会員 樋口俊介

修業の道場 (土佐の国) その2

24番(最御崎寺)～39番(延光寺)合計16ヶ寺(高知県)

海を眺め、空を仰ぎ、ひたすら前へ。室戸・足摺の2つの岬を廻り、16札所を拝の旅へ、歩き遍路には遙かな道のりの道場だ！！

23番札所(薬王寺)に参拝したあとは、およそ80kmかなたの室戸岬へと遍路の道をたどることになる。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明をします。必ず最後まで歩き通します。

第14回

平成21年6月6日(土)聖地・室戸岬に行く (三津～25番 津照寺)

歩き(ウォーキング)遍路 札所2ヵ所
約16km

24番(室戸山)最御崎寺

所在地＝高知県室戸市室戸岬町 4058-1
電話＝(0887)23-0024

宗派＝真言宗豊山派
開基＝弘法大師
本尊＝虚空像菩薩

○弘法大師が19歳の時、三教指帰の悟りを開いたといわれる有名な修行の地。

室戸岬で修行を終えた時から「空海」と名乗る。また大同2年に唐から帰った大師が、再びこの地を訪れ開基した。

◎ 虚空像菩薩について

大地と慈悲の地蔵菩薩と並んで信仰がある。福と地を無限に持ち、空と智慧を象徴する菩薩として信仰される。

25番((宝珠山)津照寺

所在地＝高知県室戸市室津 2652-イ
電話＝(0887)23-0025

宗派＝真言宗豊山派
開基＝弘法大師
本尊＝楫取地蔵菩薩

○大同2年、弘法大師により開基。漁業の安全と豊漁を祈願し、楫取地蔵菩薩を刻んで本尊として安置した。山門から本堂の途中に朱塗りの鐘楼門があり、「仏の灯台」とも呼ばれ、この寺の象徴としてたしなまれているそうです。

◎ 楫取地蔵菩薩について

弥勒菩薩が出現するまでの間、生前の因業によって、天上から地獄まで六つの世界に分けられる衆生を救済するという。

筆者紀行

5時に起床し5時55分に車で駐車場まで歩いてローソンへ、半田さんの車に便乗し林原駐車場へ着きバスに乗り換え6時40分に出発し、倉敷を経由して児島、豊浜SA、南国ICで下りて前回の歩き終えた三津まで、トイレ休憩等を含めて約4時間30分かけて到着し、11時15分頃から歩き始めてすぐに二つの洞窟があった。

向かって左側の洞窟が弘法大師が寝起き

したと言われる「御厨人窟」で、目の前には海が広がっている。そして、向かって右の洞窟が「神明窟」。大師がこの洞窟で修行をしていた時に、明けの明星が大師の口に飛び込んできて、自然と一体となり、ついに悟りを開いたと言われています。こうした大師の秘話に感動しながら、中に入って見ると何か不思議な神秘的なパワーを感じる場所でもあります。少し緊張しながら般若心経を。



御厨人窟



神明窟

外に出たら、空の明るさと海の青さにホッとしました。室戸岬まで歩き終えた所で、少し見学し昼食を室戸で11時50分～12時35分間に済ませます。

12時40分から歩き始めるも少し雨が降り出すが目的地の「最御崎寺」に向かうも札所のお寺はけっこう山の上にあることが多く山門までいくつもの上り坂をクリアして、700mの上り坂で森の中を登ってやっと山門にたどり着き、24番札所の本堂、大師堂でお参りをすませ、宝物館には数々の寺宝が保管されていて、少しだけ拝観する。



四国 24 番東寺 最御崎寺

さあ次は25番札所「津照寺」までは約6.5km、雨も上がり気持ちも新たに元気を出して歩き、途中でトイレ休憩等を取り1時間35分で到着する。地元では「津寺」と呼ば

れ、親しまれているお寺だそうです。本尊のお地蔵様は別名「楫取地蔵」と呼ばれているのだが、これは慶長7年(1602)、土佐藩主の山内一豊公が暴風雨のせいで室津沖で難破しかけたときに、一人の僧があらわれ舵を取ってくれ、無事に帰ることが出来た。そして翌日、この寺をおとずれると本尊の地蔵菩薩がびしょ濡れだったという。そこから「楫取地蔵」とよばれるようになったそうです。本堂、大師堂で念入りなお参りを済ませる。本日の予定の16kmを17時20分に終わり17時35分にバスで一路岡山へ南国IC、豊浜SA、早島IC、倉敷を経由し林原駐車場には22時20分に到着した。あと電車で我が家には22時50分に帰宅する。

足も痛く疲もあるが気分は爽快です！感謝！ なお本日の歩数(24,918)歩でした。



第 25 番楫取地蔵菩薩 津照寺

第15回

平成21年7月4日(土)土佐修行の道を行く (25番津照寺～吉良川大橋)

歩き(ウォーキング) 遍路 札所1カ所
約12km

26番(龍頭山)金剛頂寺

所在地=高知県室戸市元乙523

電話=(0887)23-0026

宗派＝真言宗豊山派
開基＝弘法大師
本尊＝薬師如来

○金剛頂寺を「西寺」最御崎寺を「東寺」と称し、以前は女人禁制の霊地だった。本尊の薬師如来は毎年12月31日から1月8日まで御開帳されている。24、25、26番札所は、あわせて「室戸三山」と呼ばれている。なお宿坊があるが要予約が必要です。

◎ 薬師如来について

人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊場にはいちばん多く祀られている。

筆者紀行

5時15分に起床して5時55分に駐車場へあと歩いてローソンにて、半田さんの車に便乗し駅前の林原駐車場に6時25分到着する。バスは6時41分に出発し倉敷に7時10分に18名を乗せ児島ICで2名で当日の参加者は総数38名で、豊浜SAでトイレ休憩を行い南国ICで下りて前回に歩き終えた津照寺で下車し、歩く前の準備体操を軽く行い当日の行動内容の説明を受けて11時40分から歩き始めて約1時間歩いた所で厄払いをしながら登っていく厄坂の階段を上がり金剛頂寺に着き気持ちを静めて本堂と大師堂でお参りを済ませ、バスで移動して近くのお店で昼食をする。

再度バスで昼前に歩き終えた所まで、13時50分から当日の目標に向かって歩き出す。この寺の霊宝殿には、大師の金銅旅檀具、朝鮮高麗時代の銅鐘、平安末期作と



金剛頂寺に向け運路路を歩く 四国 26 番西寺金剛頂寺

いう木造阿弥陀如来坐像、白鳳時代作という銅像観音菩薩立像、鎌倉時代作という真言八祖像などが たくさんの仏像が納められている。今回は拝観出来なかったが次回の楽しみにします。

またここ金剛頂寺には、弘法大師と天狗が問答したという伝説が残っており、門前には「弘法大師天狗問答」と刻んだ石碑が建っている。なお本堂の中には沢山の仏像が鎮座している、弘法大師が彫られたという本尊は秘仏で毎年12月31日～1月8日のみ御開帳されている、大師堂の中に納められている弘法大師像も毎年3月21日のみ御開帳です。

事前に予約しないとできない事や日時に合わせなければ拝観できない事などありましたが、いろんな貴重品、大切な重要文化財等がたくさんあること知りました。約4Kくらい歩いてトイレ休憩するが特に疲れや足の痛みなど感じない、なぜ今日は、特にいろんな事を教えて頂き少し物知りができて悦になった様な気分になった？

しかし11Kくらい歩いた所で汗も出るし膝のほうに少し痛むがあと2Kくらいで本日の目標に近づく、その時に自転車通学で帰宅途中の女子中学生と思われる3人がすれ違いざまにご苦労さん頑張ってと言いながら通り過ぎた何と気分の好い事、その言葉でいっぺんに疲れが吹っ飛びました。感謝感激有難う！！

吉良川集落を通り抜け16時20分に今日の目的地の吉良川大橋に到着する。川には

小船が二艘ゆっくりと疾走していた。

16時30分バスで帰路岡山へ豊浜SA
トイレ休憩し児島IC、早島IC、倉敷経由
して林原駐車場に20時45分に我が家には
21時30分に帰宅する。皆さんに感謝！
有難う！ なお本日の歩数（20,521）
歩でした。



長い長い海岸線沿いの道

第16回

平成21年9月5日(土)土佐浜街道を登る (吉良川大橋～東谷)

歩き（ウォーキング）遍路 札所0ヶ所
約20km

筆者紀行

5時10分に起床し準備、朝食等を済ませ
5時54分車で駐車場へ歩いてローソンへ
半田さんの車で林原に6時40分バスが出
発し、倉敷に7時50分を経由し児島ICで
3名の方を乗せ豊浜SAでトイレ休憩を南
国ICで下り、目的地の前回歩き終えた吉良
川大橋にバスは走る、途中の田野駅（道の駅）
で買い物とトイレ休憩を行い（11,03～
11,15分）11,25分に到着した。

約10分間の準備運動をして11時35
分から歩き始める。今日の歩きの目標は約2
0kmです、気持ちを引き締めて歩き始める
が蒸し暑い海岸線をずっと南に歩いてきた
が、室戸岬で北西方向に折り返し、ここから
もまた、長い長い海岸線沿いの道が続き歩い
ても歩いても同じようなところに感じます。
時々変化を求めて砂浜を歩くが前にも書い
たように意外と歩き難く疲れる感じがしま
す。潮風に当たり白波の大小をまじかに見て
水平線を眺めながらの歩きは最高に贅沢に
感じ足の痛さや疲れは忘れてしまいます。

しかし寺の近くに成ると高知には海辺の高
台の札所が多くて、険しい山道を何度も登り
下りします。吉良川町の白壁の美しい町並み
（吉良川の 白さまばゆき 春の空）を通り
過ぎ羽根まで約2時間歩いて13,35分頃
に到着し、そこからバスで奈半利まで行きレ
ストランで昼食を済ませ再度バスで羽根ま
で帰り、14時10分から歩き出し奈半利の町
を通り田野の繁華街を抜け安田まで、途中で
2回トイレ休憩を挟み目的地（東谷）には1
7時20分に到着する。今日の目標の20km
を約5時間10分くらい掛けて歩く。

足には豆が出来、膝も痛いし腰もと思うが
達成感の方が優越して気分爽快の方が勝り
気分良くして17時30分バスで帰路に南
国IC豊浜SAでトイレ休憩して児島、早島
ICで下り倉敷に20時30分林原駐車場
に21時20分に到着して、あと半田さんの
車で我が家に22時03分に到着する。なお
本日の歩数は（29,493）歩でした。

今日も怪我も無く無事で歩いて有難
う！！みんなに感謝、家族に感謝！！身体に
感謝！

第17回

平成21年10月3日(土) 土佐の関所寺、神峯寺へ登る(東谷～安芸川橋)

歩き(ウォーキング) 遍路 札所1ヶ所
約17km

27番(竹林山) 神峯寺

所在地=高知県安芸郡安田町唐浜 2594

電話=(0887)38-5495

宗派=真言宗豊山派 開基=行基 本尊=十一面観音菩薩

- 「土佐の関所」といわれる霊山。行基が十一面観音像を本尊として刻み、神仏を合祀。大同4年に聖武天皇の勅命により、弘法大師がこの地にとどまって伽藍を建立し、神峯寺と号して27番の霊場に定めたそうです。

◎十一面観音菩薩について

観音菩薩は姿を変えて衆生の願いに答えてくれるという。多くの面は、救済の多様性を表している。

筆者紀行

5時05分に起床して、5時55分に車で駐車場へ歩いてロウソクで友達の車で林原に、6時38分に到着しバスに乗り換えた。今日の参加者は37名とスタッフ3名、運転手で6時44分に発車し倉敷を經由して早島IC、児島IC、豊浜SAでトイレ休憩をする。

前回に歩き終えた安田町には10時43分に着き、準備運動を軽く行い10時55頃から歩き出すが、今日お参りする神峯寺は標高632mの神峯山の中腹、海拔450mあたりに位置し「真っ縦(まったて)」といわれる、山頂までの一気の上り坂45度の急勾配は別名「遍路泣かせ」今まで訪れた中でも1番の

難所で、「遍路ころがし」と呼ばれている。

歩き出して約1時間30分かけて山門(立派な仁王像が安置されている)に到着したが、とにかく大変でした。修行の道場だと言われる通り、すこし登り直ぐに足がすべり下がるを繰り返し前へ上へ、皆で六根清浄を唱えながら前の人をカバーしての連帯意識を持ち何とか登り、視界が開ける場所で振り返ると、今まで歩いてきた道、越えて来た山が遠くに見える。あんな所から歩いてきたんだ~と思える瞬間です。かくして歩いた者しか味わえない爽快で山門に着いたときの気分は清々しく最高でした。



難所の「遍路ころがし」を歩く「真っ縦(まったて)」を上がり
第27番神峯寺

左に納経所、右に鐘楼があり、鐘楼の裏手に湧いている石清水は別名「神峯の水」ともよばれており、今でも、この霊水を求めてやってくる人も多いという。私もひとくち飲んで見たが、とても身体にいい感じがした。

先達さん以下の37名で御参り(大変迫力があります)を済ませ、トイレ休憩等して境内で各人が適当な所で弁当を食べ下山しますが、13時20頃から歩き出すも、下りも大変です私は2回も滑って転げましたが、何とか無事で下りることが出来ました。

唐浜の町並みを通り“男はつらいよ”平成8年映画の高知ロケ予定地に寅さん地蔵やカラーの寅さん等の説明文や看板が周囲に整備されていた場所で休憩して、大山岬で景観をゆっくりと堪能して、当日の目摘地の安芸川橋には17時25分に到着し、本日の目標の約17km(中味の濃い歩き遍路でした)を歩き終えた。

寅さん「男はつらいよ」のロケ地



寅さん地蔵



17時34分に岡山へ南国ICで入り豊浜SAで買い物、トイレ休憩を済ませ児島IC、早島ICで下りて倉敷を經由して林原駐車場に21時23分に到着し、半田さんの車に便乗して我が家には22時03分帰宅する。なお本日の歩数は(27,863)歩でした。

本日も無事で帰れて足には豆が2個もでき腰も痛い、何か体の中に風が通りぬけた様な感じがして疲れが飛んでしまい、気分が晴れ晴れとなる不思議な瞬間を味わう！！

皆に感謝！！家族に感謝！！身体に感謝！！ありがとう！！

第18回

平成21年11月7日(土) 白浜の浜に沿って歩く(安芸川橋～赤岡橋)

歩き(ウォーキング) 遍路 札所0ヶ所
約23km

筆者紀行

5時15分に起床して5時55分に車で駐車場へあと歩いてローソンで、半田さんの車に便乗して林原駐車場に6時20分到着し、バスに乗り換え6時41分に発車して倉敷を經由で早島IC、児島IC、豊浜SAでトイレ休憩して、前回歩き終えた安芸川橋に10時47分に到着し、軽く準備運動と当日の行程等の説明を受け11時02分から歩き始める途中で遍路道をちょっと外れて海岸を歩く、「黒潮洗う」という言葉がびつたりの高知。太平洋は雄大で、時に荒々しく、

時に穏やかに静まり返り、多彩な自然の表情を見せてくれます。人は、港町が多いから、豪快で飾らない方が多く、皆さん人情味に富んでいます。「がんばって」と声をかけてくれ、それが励みになり元気がでます。

安芸市には田園のなかに立つ野良時計、武家屋敷など風情のある町並みが残り、また土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線の電車(黄色)の走りを眺めながらの歩きは心が安らぐ。

赤野まで約14kmを歩き、そこで昼食(50分)を済ませて、再度歩き初めて手結港の巨大な可動橋を(時間がくると車が通れるように降ろされる)遠くに見て、16mもある防波堤(それでも波が越えることもあるとか)の近くを通り過ぎるが人も自然も雄大だ！



太平洋は雄大で高知の「黒潮洗う」言葉がびつたり



日本一高い防波堤 海面より16m

途中に「龍馬歴史館」があったが時間の関係で入れずに、ほうえい橋を渡り川沿いを歩き本日の目標地の赤岡橋まで約23kmを約5時間30分掛けて17時10分に到着する。

赤岡橋を17時20分に出発し帰路へ南国ICに入り豊浜SAでトイレ休憩等をして、児島IC、早島ICで下り倉敷を經由して、林原駐車場に20時45分に着き友達の車に便乗して我が家には21時30分に帰宅する。今日も無事に帰れてありがとう！！

なお本日の歩数は(34,722)歩でした。皆に感謝！！家族に感謝！！身体に感謝！！

编者 この連載はまだまだ続きます。
お楽しみに！！

例会活動報告

第1回 5月例会

開催日 平成25年5月22日
場所 ゆうあいセンター2階
時間 13:00~16:30

第1部 基調報告 丸谷憲二会長
『吉備国古代製鉄と熊山遺跡』

第2部 『古代製鉄 たたら』
講師 元川鉄技師=福留正治会員
JFF21世紀財団編集のDVDを
上映(約20分)しながら解説し
ていただく。
最先端の技術者が「製鉄」につ
いて臨場感ある解説を戴きまし
た。

DVDを預かっていますので、希
望者は事務局まで連絡下さい。試
聴できます。

第2回 7月例会

開催日 平成25年7月17日
場所 ゆうあいセンター2階
時間 13:00~16:30
講師=矢吹 寿年 会員
テーマ=『縄文時代は風水を知っていた

か』

『縄文人はどこから来たか』

風水は中国=大陸から入った思想ば
かりでなく、日本の縄文時代からの独自
の発展をしたとの、自説を豊富な資料で
解説いただきました。当日添付した資料
を参照下さい。「矢吹さんの資料箇所を

現地確認したい」との声もありました。
吉備児島探訪シリーズの後考えます。

当日は笠岡の高島探訪会に参加いた
だいた泉さんが参加されましたので、彼
女の小説『溜め息の結晶』の作品の紹介
を兼ねた山崎のエッセイを配布しまし
た。参加できなかった皆さんにもお届け
します。参加者は準備した会場が満席に
なる盛況でした。

第3回 9月例会

開催日 平成25年9月18日
場所 ゆうあいセンター2階
時間 13:00~16:30
テーマ 『歩き遍路と自転車遍路』
鼎談方式のパネルディスカッション
パネラー=歩き遍路 樋口俊介会員
自転車 中島康之会員
コーディネーター=山崎泰二

樋口氏から映像を使いながら、遍路
の基本を学び、お二人の遍路経験を
鼎談方式で窺いました。

宗教心を超越した醍醐味のある話に
参加者の皆さん時間を忘れるほどで
した。

樋口さんの「歩き遍路の旅」はこの
“きび考”で連載中です。引き続き
お楽しみ下さい。

今後の例会案内

第4回 11月例会

開催日 平成25年11月19日(火)
場所 ゆうあいセンター2階
時間 13:00~16:30
テーマ 『芥子山界限 方位や史跡』
講師 尾高庸子会員を中心に西大寺
の会員仲間(岡崎巖・丸谷)

古代の方位などに詳しい尾高講師は芥子山の麓で、長く調査研究をなされています。地元の耳慣れないお話が聞けそうです。お楽しみに。

第5回 2月例会

記紀にて馴染みの『児島の高島』第三弾として、邑久・牛窓に展開する＝吉備の高島を探訪します。

郷土史家の岡崎春樹(会員)氏に案内いただきます。詳細は次回の例会までに纏めます。車の相乗りで移動を検討中。

岡崎春樹氏は研究成果を出版準備中です。そのエキス部分を紹介いただけたと思います。

例会の資料も充実しています。資料代として実費(500-)を載っています。必用な方は、次の例会にてお渡しします。事務局まで申出下さい。(1~3回分)

編集後記

- 本年度から隔月で例会を開催します。基本的に会員の研究発表と会員相互の研鑽を目的にしています。(総会は講演会を兼ねる)
- 今回から女性会員の村山三枝子さんが寄稿いただきました。今は亡きご尊父の遺作を再版され、自ら解説されています。今後の活躍が期待されます。
- 矢吹壽年氏が吉備の穴海の地質学見地で先史を解説されました。岡山一番の観光地蒜山地域が古代「蒜山湖」で、自宅の7m底から上が流出土だそうです。臨場感のあるお話です。
- 次号の発行予定は、平成26年3月です。2月末の原稿締め切りまでに、原稿を温めておいて下さい。

“きび考” 第8号

2013(平成25)年10月10日発行

発行 先史古代研究会

会長 丸谷 憲二

事務局 702-8002

岡山県岡山市中区桑野 504-1

山崎泰二方

電話=086-276-6654

FAX=086-276-2241

メール=senshi@bosaisystem.co.jp

(事務局専用)

HP=<http://www.hasukura.com/sensikodai.htm>

編集委員

山崎泰二(事務局長兼編集責任者)

井上秀男 延原勝志 樋口俊介

丸谷憲二 濱手英之 本松一郎